

宮内庁 養蚕所助手に井戸さん

4月14日、加茂農林高校生物工学科を今春卒業した、久田見の井戸駿介(いどうしゅんすけ)さんが、今年度の宮内庁養蚕所助手に選ばれ、その報告に役場を訪れました。

養蚕助手は、皇居内の紅葉山(もみじやま)御養蚕所で、皇后陛下が育てられる蚕の世話を4月17日～6月26日までの71日間皇居内の宿舎に泊まり込みで行う仕事です。全国から4名選ばれ、加茂農林高校からは19年連続で選出されています。

皇室における養蚕の歴史はかなり古く、日本書紀にも記されており、現在の御養蚕は明治4年に復興され、宮中の大切な行事として受け継がれています。

現在井戸さんは、愛知県丹羽郡大口町の㈱シルビアで勤めており、長期休暇となりますが職場からも快く送り出されました。

井戸さんは、「一生一度の経験で、名誉なことでもあるので、この経験をこれからの生活に生かしていきたいと思います。」と抱負を述べました。赤塚町長は、「71日間の経験が井戸さんにとって素晴らしいものになるでしょう。がんばってきてください。」と激励しました。



赤塚町長と決意の固い握手を交わす井戸さん

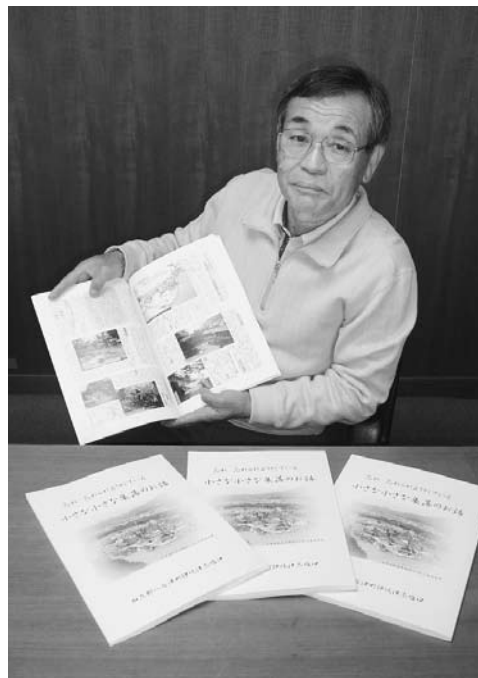
郷土の歴史をまとめた冊子を発行

伊岐津志塩口の和田義昭さん(67歳)が、このほど同集落の歴史をまとめた冊子「忘れ 忘れられようとしている 小さな小さな集落のお話」(A4版74ページ 150部)を発行しました。

和田さんは、教職を退職した2年後の平成17年から、11年間社会教育に関わったノウハウを活かし、塩口集落を中心とした歴史研究を開始。地域にまつわる神社や絵図、石仏、さらに行事や祭事、風習、産業、観光など、調査を続けました。平成19年度に塩口自治会長を務めた際、シリーズで調査の結果を自治会員に回覧したところ、それを見た多くの住民からさらに多くの情報や写真が寄せられ、集落にまつわるより多くの史実が分かってきました。

一通り研究をまとめた今年、「急激な社会の変動により、地域住民のつながりや世代が交わる場が無くなっている。小さな塩口集落の活動は、何処の集落でも見られた人間模様。そんな郷土の歴史を語り伝えていくことで、地域住民の絆、連帯感をさらに育んでいきたい」という思いから自費出版にこぎ着けました。

冊子は写真や絵図を多数掲載しながら、長老や住民から直接取材した生の語りを多く掲載。懐かしい集落の出来事や人間模様、貴重な郷土の歴史が掲載されています。冊子は塩口集落の全世帯(92戸)と町教育委員会などに配布しました。販売はありませんが、中央公民館、錦津公民館の図書室で閲覧が可能です。



発行した冊子を手にする和田さん